

牛久市文化財保護審議委員 栗原 功

ひたち野中央区(旧北部区)史概要 後編

吉井友実の明治維新における

—薩摩では西郷二千石 大久保一千八百石に次ぐ—

吉井 友実

吉井友実は、文政11年(1828年)に薩摩藩士吉井友昌の長男として鹿児島城下高麗町(現・上之園町)に生まれた。20代から行動を共にしていた西郷隆盛より1歳若く、大久保利通よりは2歳年上であった。

幕末(江戸幕府の末期)で、嘉永6年(1853年)ペリー来航後をさす、文久元年(1861年)に吉井は、徒目付に抜擢されて京都に上った。以降吉井は、軍賦役の西郷隆盛、軍奉行の伊地知正治とともに在京薩摩勢を代表する立場になった。6年後の慶応3年(1867年)、土佐の中岡慎太郎の仲介により、土佐藩の板垣退助らと接触するようになった。吉井は、同年11月15日、五ツ半時(午後9時)頃、京都四条河原町通り蛸薬師の醤油商近江屋新助方、西側2階奥の

8日間、中岡慎太郎と坂本竜馬が襲撃された現場に田中光顕(土佐藩士)と逸早く駆けつけた。

明治元年(1868年)に新政府が発足すると吉井は、徴士に任命され、ついで新政府最高職3職(総裁・議定・参与)のうちの参与に任命された。吉井が立てた維新の勲功で、下賜された賞典禄は1千石で、薩摩では第3位、長州の大村益次郎は1千5百石、土佐の板垣退助は8百石であった。

その後吉井は、政府の司法・民部・工部・宮内各省の要職を歴任した。明治10年(1877年)に起こった西南の役に際して吉井は、西郷と大久保の間に入り戦い回避工作に奔走したが、その甲斐はなかった。

明治17年(1884年)に発せられた華族令で、吉井は国家に勲功ある者として華族に列し、

伯爵を授けられたが、同24年(1891年)に63歳を一期として没した。公・侯・伯・子・男であった。

吉井の荒川沖農場経営

—のちに北部区—

その一方で吉井は、明治14年(1881年)に荒川沖農場(吉井農場)経営に着手した。荒川沖農場は、信太郡荒川沖村(現・土浦市と阿見町)から河内郡中根村と東大和田村(現・牛久市)にかけての官有(国有)地一三九町歩を借り受け、管理人のもとで農夫を雇い原野を開墾して耕作した西洋式の農場であった(明治24年に吉井が没すると農場は廃場となった)。

吉井農場跡地は、明治時代中期から大正時代にかけて、各地から移住してきた人々によって耕作され、大中北部区が構成された。

北部ニュータウン

づくり計画の概要

—昭和57年度に
大野正雄町長の下で策定—

広報うしく昭和57年(1982年)6月1日号に掲載されていた『北部ニュータウン』計画の

素案を基にしてその概要を記述してみた。

そもそも昭和60年に開かれる科学万博つくば85の観客輸送手段として、牛久々荒川沖駅間(当町の北部地区)に臨時駅(万博中央駅)が設置されることになった。それに伴って牛久町(町長大野正雄)では、臨時駅を恒久駅化する、ここを中心にして、北部区、東猫穴区、大中区、下根区のうち、約380ヘクタールを対象に3万人の人口定着を目指す、北部ニュータウンづくりを早期に行うという遠大な計画が立案されていたのだ。それによると、筑波研究学園都市と連携をし、新駅を中心として、商業施設をもつ、田園景観に配慮し、緑豊かな安全で住みよい街をつくる。道路、上・下水などの整備はもとより、スポーツ施設を備え、住民のいこいの場となる近隣公園、子供たちが安心して遊べる児童公園の設置。小・中学校だけでなく高校など教育・文化施設の設置。病院など医療施設や、郵便局、消防施設の設置等々で、街づくりは住宅都市整備公団(現UR)にお手伝いしてもらおうというものであった。

北部ニュータウンづくりの計画書は大野正雄町長の下で策定された。大野町長は昭和61年6月に市制を布くに伴い初代の市長に就任した。

吉井勇(小説家で歌人でゴンドラの唄などの詩人)は孫にあたる。

吉井友実

(文政11年(1828年)~明治24年(1891年))
出典：鹿児島市内の史跡めぐりガイドブック人物編—提供は鹿児島市教育委員会



臨時駅・万博中央駅(旧北部区)。昭和60年3月14日~9月16日まで、つくば市で『国際科学技術博覧会(略称科学万博)』が開催された。当臨時駅と会場を観客延べ380万人余りが連節バスに乗って往復した。